

中日古代墳丘墓の比較研究

りゅう しんとう

劉 振東

本文は主に三つの問題を論じ、第一は中国の東周から南北朝までの墓葬制度、特に墓葬等級制度、第二は中国の古代人の冥界観、第三は中日古代の墳丘墓制の関係である。

中国古代の墓葬等級制度に関して、西周及び東周の墓葬等級制度の核心をなしていたのは深く地下に埋めた棺槨・用鼎・車馬随葬制度であった。前漢・後漢の墓葬等級制度は、地上・地下の両部分によって具現されるようになった。地上部分の中心は墳丘であり、墳丘の高さを用いて被葬者の等級秩序を厳格に定めた。地下部分は、墓葬の形態を除くと、主に殮服の玉衣を用いて等級の格差を具現化した。魏晋期の墓制の核心は薄葬である。地上施設は全て廃止され、地下の墓室・棺槨・副葬品はみな簡略化され、玉衣の殮服は徹底的に放棄されるに至った。しかし魏晋は、国の存続が短期間であるなどの原因により、比較的厳格な葬送等級制度をおそらくは形成しなかった。魏晋期に創出された薄葬の制は、十六国から南北朝に至る墓葬に対して一定の影響を与えた。しかし同時に、十六国期が始まると、魏晋の薄葬の制は次第に破壊されていった。例えば、地上施設が再び登場した。南北朝期に至ると、又地上・地下の諸施設による墓葬等級制度が一体的に構成され、しかもこれらは比較的成熟した段階にまで達していた。南北朝の墓制は厚葬の風を再開し、隋唐の墓制に重要な影響を与えた。

中国の古代人の冥界観について、中国の古代人は、死とは現実生活や生命の終了であり、同時にまた別種の新生活や新たな生命の開始だと見なしていた。そのため死後を、すなわち葬儀の処置を極めて重要視していた。古代人は墓葬をまさに死後の新生活・新生命の舞台と見なし、それゆえ死後の別世界、即ち冥界の経営に精魂を込めたのであった。冥界を想像して構築されたものは現実世界を模倣して複製したものである。従って、地下の墓葬を通じて地上の現世を見ることができるのである。

中日古代の墳丘墓制の関係について、全体的に看取できることは、弥生時代の墳丘墓及び古墳時代の前方後円墳の形態と中国大陸の中原地域における戦国・秦漢・魏晋・南北朝の墓制とは直接的な関係が認められないことである。しかし当時における日本社会の変化は中国大陸及び韓半島からの影響と密接な関係があったのである。従って、弥生墓制と古墳の埋葬はどちらも、中国大陸及び韓半島の情勢から間接的な影響を受けていたとすることができる。